

第2回 教育力向上福岡県民会議 議事録（要旨）

1 日時 平成19年8月29日 14:00～17:20

2 場所 ホテルサンヒルズ博多「星雲の間」

3 会議次第

(1) 開会

(2) 教育力向上福岡県民会議委員紹介（第1回欠席者）

(3) 議事

今後のスケジュール（案）第1回会議の意見交換のまとめについて
意見交換

4 会議内容等

< 県民会議委員紹介 >

第1回欠席者 麻生委員、北城委員を紹介。

< 今後のスケジュール（案）第1回会議のまとめの説明 >

【事務局より】

「今後のスケジュール（案）：資料1 について」

- ・ 「教育力向上福岡県民会議」の提言を、「福岡の教育」ビジョンとして、広く県民に周知・啓発し、福岡県の教育力を向上していこうと考えている。
- ・ 第2回会議では、「福岡の教育」ビジョンに盛り込むべき、本県教育が抱える本質的課題、また、その解決に向けての意見を伺いたい。
- ・ 本日の意見は、事務局側で集約し、「ビジョン」の骨子案の形で次回会議に提示し、委員の審議を経て「ビジョン骨子案」を決定する。
- ・ 骨子案は、広く県民の意見を聴取するため、10月以降に県内6カ所で開催予定の「地区分科会」に提示し、意見交換等を行う。
- ・ 「地区分科会」は、市町村行政関係者、学校教育関係者、PTA、青少年育成団体関係者などで構成することを考えている。
- ・ 「地区分科会」での意見を本県民会議に報告し、これらを踏まえた「第一次提言案」を審議いただくために11月に第4回の県民会議の開催をお願いしたい。
- ・ 第4回会議の審議を踏まえ、「第一次提言案」の最終審議を12月中旬の第5回会議で行い、12月下旬に知事に対する「第一次提言」の報告をいただきたい。
- ・ その後、「第一次提言」の具体化に向け、県民を巻き込んだ全県的な取組としての「教育力向上県民運動」を展開するための方策について検討を進める。
- ・ 来年の1月以降に「教育力向上県民会議」を展開するための方策を検討する「専門部会」を設置し、運動論を中心とした「第二次提言」に向けての検討を進めた

い。

- ・ 来年4月に開催する第6回会議で「専門部会」の検討結果を報告し、それを踏まえた「第二次提言案」を審議し、さらに、「地区分科会」を実施した後、6月頃に「第二次提言」をまとめていただきたい。

「第1回会議における意見交換のまとめ：資料2 について」

- ・ 第1回会議でいただいた意見を、事務局から提案した4つの課題を柱に、子どもの現状、要因、課題解決の方向性に分けて整理したものであり、本日審議いただく内容の基礎資料として提示している。

【会長】 質問。「県民会議委員の事前聴取意見」は何か。

【事務局】

今回の会議の出席依頼とともに、「意見がある委員は事前にお知らせいただきたい」とお願いしたところ、3名の委員から提出があり、それを事務局でまとめたもの。

【会長】

現状などは福岡県独自のものではなく、全国的なものであるが、「福岡県はこのようにやるんだ。」という積極的な提言、実効できる提言にするために、目に見える具体的な行動計画につながるようにしたい。

<意見交換（要旨）>

福岡県でできる目標をつくり、積極的な提言ができればと考えている。分かりやすい標語などをつくると良い。例えば、「思いやりのある福岡県人」、「熱くなれる福岡県人」のように。

日本人に共通する苦手なことを教えるために、「グローバルシチズン」づくりを行ってはどうか。相手のことを思いやって、自分のことを言えて、人のためにやろう、地域のためにやろうという福岡県人を育てる。こういう高いビジョンがあれば、いろいろな現場で、いろいろなレベルで取り組めるのではないか。そうすれば、現状の課題解決にもつながるし、結果として福岡県の人材を育成することになる。

福岡県から日本を変える、日本を動かすという会議にしたい。

産業界で求めている人材は、10～15年前とずいぶん違う。経済同友会が実施した調査で「企業が採用する際に重視する事項」は、245社のうち、222社が「第1に面接の結果の人物で評価する」と回答している。「第1に出身校」が1社、「第1に学校での成績」は0社である。つまり、昔は「有名大学に入っ

ていい成績をとる」人材を求めていたが、今は違う。

求めているのは、まず、意欲のある学生である。自分で何かを成し遂げようという意欲をもっている人材を求めている。また、自ら考えて判断できる学生、それから、チームワーク、コミュニケーションができる学生、それから当然であるが規範意識のある学生である。

産業界が求める人材を踏まえた上で、福岡県はどんな人材を育てたいのかという目標を明らかにして、それに対して、今何が欠けているかということを経論しなくてはいけないのではないか。そうすれば重要な対策も出てくる。

例えば、フィンランドで読解力が高いという背景にあるのは、起業家、すなわち事業を興す人材を育成するという目標である。その目標達成のために、自ら判断したり、表現したり、読解力が必要であったりするるのである。生活が豊かになったり、福祉が充実したりすると、国民は、意欲的に挑戦する力が弱くなってしまふ。それでは国が発展しない。そのために自ら挑戦する人材を育てようとしているのがフィンランドの教育である。読解力が必要であるという発想ではなく、どんな人材が必要なのかということが重要である。

例えば、安部首相の言う「オープンで、イノベーションで国を発展」させるのであれば、イノベーションの担い手を育成しなければならない。そのために何をするのかという議論が必要となってくる。

福岡県で実施することで可能性があることの一つに、大学入試の見直しがある。県民会議で議論する「あるべき子ども」の姿と、大学に合格する子どもの姿が違っていると県民運動となりにくい。

九州大学では「21世紀プログラム」という入学制度があり、センター入試、筆記試験を課さずに、講義を受けた感想文と高校の評価で一次試験を行い、二次試験では全員でのディベート、あるテーマに関する小論文を実施するという入学選考を行っている。入学後も4年生までに学科等を自分で決定する。その学生は意欲や行動力が高い。

この県民会議は、家庭教育、幼児教育、初等中等教育が主体であって、高等教育がその続きであるという立場で議論するのか、教育全体についての議論なのか。

【説明】 大学、高等教育も視野に入れて議論していただきたい。

国立教育政策研究所の調査によると、学習意欲が低い理由として、87%以上が「授業が分からないから」と回答している。「わかる授業」を実現していくことが重要である。

ICTを活用した授業では、学習意欲が高まり、理解度も高いという成果を得た。その成果を受け、文部科学省では全国10地域でICTを活用したプログラムの

実証授業を実施する。

教師の教育力も必要である。ICT の活用能力は、全ての教員に育成すべきものであり、研修の充実が望まれる。

事務局から示された課題は、児童・生徒・学生側からみたものであり、教師側からみたものもあるのではないか。

目標をはっきりさせて議論した方がよい。「心豊かで、取り組む意欲」があれば「教育力向上」なのか。

「教育力」をどのように捉えるのか、また、福岡県としては、幅広い「教育力」の中のどこに絞って、何をやっていくのかということをはっきりさせたほうがよい。教師、生徒、PTAが取り組むことがはっきりしてくる。

福岡県がどのような人材を求めているのか、教育力とは何を指しているのかということを確認してほしい。

【説明】 こういう問題へのアプローチの仕方として、一つは「具体的にどういう人材を欲するのか」という方法があるが、デメリットとして、例えば、「福岡県では起業家となる人材を欲している」と具体化した途端、「起業家になるだけが福岡県の教育の目的なのか」、「もっとしっかりした市民を育成すべきではないか」、「芸術にも重きをおくべきではないか」という議論になってしまう。そのため、具体的な人物像は設定していない。

- ・ どういう人物像を目指すのであれ、現在の我々の教育に欠けているもの、課題は何なのかという観点から、「積極的に学ぼうとする意欲が低い」「自尊心や自信をもっていない」「社会と自分とのかかわりについての理解がない」「体力の低下」の4つを共通項の基本的な課題として提起した。これについての現状認識と対処方法について考えてみるという手法はどうかということである。もっと別の観点からの問題提起があっても構わない。

「教育力」についてもう少し明らかにしてほしいが、この4つを取り組めば、「教育力」が向上すると捉えてよいのか。

【説明】 教育に関する基本的な課題を解決するための問題点を把握し、解決のための方法を見出し、実行することが「教育力」であると捉えている。

「体力の低下」という課題があるのに、なぜ「学力の低下」という課題はないのか。

【説明】 学力の低下が指摘されていることは事実である。学力の範囲はいろいろとあるが、一番根底にあるのは、積極的に学ぼうとする意欲が低いということであると考えている。学力の低下という直接的なものよりも意欲の低下に本質的な課題があると捉えている。

教師の教え方という項目を設けるのか、それとも学ぶ意欲に含まれるのか、そういうことも含めて議論していく。

例えば、「学ぶ意欲をもった、自信のあるモラルの高い子どもを育てる」のように目標像をもとに議論したほうがよいのではないか。課題を書くよりも目標像と取組を書いたほうがよい。そして、目標としている人材が大学へ入学できるように、大学に向けての提言も含めるとどうか。

4つの課題は日本共通である。期待しているのは、福岡は具体的に解決策を考えて動き出しているということを示したい。福岡県独自の目標像は必要である。

グローバルシチズンをイメージしている。スポーツや芸能は福岡は強いので、「熱くなれる福岡人」のように、高い次元での福岡県人の人材像を設定したい。

福岡県のつくる人物像を設定するほうが、提言としてはインパクトがあるという意見だと理解している。

「教育力向上」と考えると、対象は学校、教師、保護者となる。対象が学校、教師の場合、この提言は文部科学省の指導との乖離がどの程度許容されるのか。幼保・小・中・高・大と、子どもの成長に合わせた目標の設定をして欲しい。

制度や制約を考えた議論よりも、理想を含めた自由な意見をまとめたい。そして、現実的な問題点を抽出し、さらに検討していきたい。

よりよい人間関係づくりも必要ではないか。子どもを取り巻く人間関係と学校・家庭・地域の人間関係をよりよいものにしていくということも必要である。

別の視点から。少子化により学校規模も小さくなっている。学校の教員数が少なくっても、校務や教育活動は同じである。そのため小規模になればなるほど、教師は忙しくなる。

学校の集団の教育力や人間関係づくりを考えたときに、適正な学校規模についても考える必要があるのではないか。

小・中学校は市町村立、高等学校は県立だが、中高一貫教育というのは可能なのか。

【説明】 県の施策として中高一貫教育を進めている。学習指導要領もそうになっている。また、宗像市では小中一貫教育を推進しているし、県立の中高一貫校、中等教育学校もある。私学はかなり前からそういった学校づくりを進めている。

今から学校規模を適正化することは難しいと思うが、学校の枠を超えた教育活動はできるのではないか。例えば、社会科見学、修学旅行などを合同にし、担当を分担すれば、教師にも余裕が生まれるのではないか。

子どもたちが大人になる成長過程の各段階でどういう関わり方をするか。特に、青年前期、第二次性徴の時期の関わり方が大切ではないか。

いきすぎた平等主義の結果、尊敬することを否定する風潮がある。理想だけの提言は難しい。現実を踏まえ、つっこんだ議論をしたい。

自尊心「自分はかけがえのない存在だ。」など、自分を肯定的に評価することについては、福岡県だけでなく全国的に見ても非常に低い状態である。福岡県の青少年課の調査でも、「自分はなにをやってもだめな人間だ。」と思っている子が小学生で4割、中高生で6割であり、低すぎる。様々な調査のどのデータを見ても、わずかに低いのではなく、極端に低い。

自分のいいところを言えない子が多く、これでは伸びようがない。背景に何があるのか、要因に何があるのかということが大きな課題となる。自分を肯定的に評価できるように育成しなければならない。

様々な調査では、何が悪いということは公表されているが、その要因は何かと言うことはほとんど報告されていない。解決策がなければ議論しても意味がない。なんとか、解決策を提案したい。

日本、中国、アメリカの学生と接する機会がよくあるが、私が講演したときに積極的に手を挙げて質問するのは、中国やアメリカの学生。日本の学生はただ聞くだけで質問しない。

受け身的である背景には、日本の子どもたちは、与えられたものを覚える教育をされてきたからではないか。

日本は、全体の平均で評価されることが多い。得意なことを褒められればよいのだが、トータルの点数が高いほうが価値があるとされている。その学力も与えられたものを暗記することも必要だが、ただ受け入れるだけになっている。何か新しいものに挑戦したり、発見したりする子にはならない。

日本は豊かだから、努力しなくても生活に困らない。これでは学ぶための動機付けは難しい。

アンビシャスの三原則の1つに「褒める」ことを挙げている。日本の子どもたちは褒められることが少ない。しかも、褒められることのほとんどは学力のトータルのことである。当たり前のことを褒めることがまず無い。

体験活動の中で自信をつけさせることも必要。

アメリカではよく「エンカレッジ(Encourage: ほめる、勇気づける)」という。これが非常に重要であると思う。アメリカでは Encourage という言葉を教育する現場、家庭でよく使う。

日本では得意なことをさせずに、苦手なことに取り組ませる。数学が得意で、国語が苦手な子に「あなたは数学はいいから、国語をもっとがんばりなさい。」と喋ってしまう。トータルの点数を高くしようとする意識が強い。

「生活が豊かである」といった構造的なことをいっても仕方がない。その現状の中で我々が何をやるかということを考えないといけない。信念とやりがいをもって少なくとも5年間はしつこく取り組み続けないと成果は現れない。

現状をしっかりと踏まえて、オリジナルの取り組みを提言したい。

この県民会議では高学歴の子どもだけをつくっていくのか。それとも、人として、人間として、社会人として、社会に開いた教育を展開するのか。

子どもの育つ環境はかなり変わっている。確かに便利になっているが、「面白いな」、「不思議だな」といったことを体で感じさせ、覚えさせることが大切だと考える。年代にあった体験が必要である。

幼稚園児を3泊4日の保育園との交流活動を行った。4日間であったが、子どもは大きく成長した。体験の大切を実感した。

基本は小さいときにしっかり育てる。自分で責任を取れる子、親を尊敬する子、感謝する子を育てていかななくてはならない。

親が学校や幼稚園に協力してくれるが、親だけが草取りをするのはどうかと感じている。

地区全体の学校で授業改善に取り組んでいる。子どもたちのよいところをどう引き出すのが課題。教師はほめるのが苦手である。

キャリア教育は、これからの生き方を子ども自身が考える上で重要である。

学力と社会性を基本として、生徒に身に付けさせたい。

現在、地域運営学校に取り組んでいる。学校、家庭、地域が目標を共有し、役割を分担して、三者で子どもたちを育てる「共育風土の醸成」を行っている。

子どもたちをどのように育てたいのかという教師、保護者、地域へアンケートを実施し、目標を共有した。その中で、課題として「学力面」「生活面」「モラル面」「安全面」の4つが明らかになった。

課題解決のための取り組みの1つとして、地域活動に参加する子どもを育成したいが、なかなか参加しない。親を含めて地域に対する関心が低く、人と関わることを面倒だと感じていることが原因と思う。

教師の役割は非常に大きい。課題解決の方向へ導く力を向上させる取り組みも必要。

親も教師もゆとりがない。ゆとり教育に取り組んで学校はゆとりをなくした。

保護者も学校がサービス業であるという意識をもっており、ヘリコプターペアレント、モンスターペアレントといった現象を生んでいる。

福岡県では非行率が高いが、非行の多くは深夜徘徊である。しかも、補導された子どもの親は、我が子の深夜徘徊の実態を知らない。11時過ぎても子どもの行く先を知らない親が増えているのも確かである。

新家庭教育宣言も、担任が意識をもって取り組んでいる場合は、家庭教育も向上している。

ゆとり教育を検証して、教師が子どもと向き合う時間をつくるのが大切。

我々は現役の教育の責任者である。もちろん、社会の構造的な問題もある。

過去と比較して「取り組んでいる」とか「がんばっている」といっても、結果として課題がでていいる。一番進んでいる都道府県などと比較することをしないと成長しないのではないか。産業界では許されない。

現場では努力しているが、組織として効果がでていない。また、学校だけの取り組みでは難しい。組織としてよい方向に向くような提言をしなくてはいけない。

悩みの多い教師、悩みの多い母親、仕事で忙しい父親の中で、子どもたちは現状を抱えて右往左往している。その中で、私たちは目標を掲げ、福岡らしさを出す「パワーアップ福岡アクション」のようなオリジナルのアクションを、大人も子どもの前に向かって進めたらよいと思う。

大人は、「仕事」、「家庭」、「地域」、「余暇」の4つのバランスがとれているときに新しいエネルギーが生まれるそうだが、子どもも「勉強」だけではなく、いくつのものでバランスをとっていかを考える必要がある。

大人は子どものモデルなので、我々大人（教師も含め）がこれからどう生きるかということ子どもと競い合っていく、大人と子どもに共通的な目標を掲げられるとよい。

子どもという「木」を育てるために、「土壌」という親がいて、学校という「風」が吹いて、地域という「光」をどう当てるのか。この「木」のために、みんながよい「土壌」、よい「風」、よい「光」をどのようにできるのかということを知りやすくまとめられるとよいなと思います。

アンビシャスと両輪で推進していきたい。

学校の教育力、教師の教育力、家庭の教育力、地域の教育力をどう高めていく

か。地域コミュニティの教育力をどう高めるか。地域ごとに任せて、アイデアを募り、地域で推進することがポイント。

子どもの教育力、教え合う力を育成する。学校で、地域で、子どもたちが教え合うことを大切にしたい。

「教育力」を考えたときに、「教える」ことも大切だが、「引き出す」ことも必要である。どういう子どもを育てたいかという目標があって、それに応じた教育の支援がある。どういう子どもを育てるかという方向を考えると、学力の点数の高い子を育てるのか、学ぶ意欲の高い子を育てるのかを判断しなければならない。

例えば、「自ら学ぶ意欲の高い、自分に誇りをもつ、規範意識の高い県民」を育てるといように、3つぐらいの目標像を設定すると焦点がはっきりして、分かりやすく、取り組みやすいのではないか。

小平市や三鷹市のように、よい取り組みを行っている自治体を参考にしながら、県の独自性を出していくとよい。

福岡県が求める人材を設定すべきという意見が多い。

尊敬や感謝、社会性など当たり前のことができていない。何十年かけてできなくなったことを解決するには、その倍の時間がかかる。しかし、今、提言しなければならない。県全体として動いていく必要がある。

【説明】 青少年アンビシャス運動を取り組んできた。アンビシャス運動では、「豊かな心」、「幅広い視野」、「それぞれの志」をもつ「たくましい」青少年の育成を目指している。しかし、少し抽象的であった。

- ・ また、運動の方法の原則として「ほめて伸ばす」「自主的参加」「交流と相互評価」ということを設定したが、やはり抽象的であり、具体的な12の運動の中身を設定した。例えば、「読書活動」、「外国の青少年との切磋琢磨の機会」、「自然体験」などを展開している。一番の課題は「家庭教育」への働きかけである。
- ・ アンビシャス広場づくりは、週5日制の実施に伴い、地域等の受け皿づくりをおこなった。
- ・ アンビシャス運動は、学校の外の運動として実施したが、学校とともに取り組むために「県民会議」を設置した。
- ・ 結果平等教育ではなく、それぞれの子どもよさを伸ばそうとすることがアンビシャス運動の考え方の基盤にある。
- ・ アンビシャス運動の展開の仕方としては、求める人材を設定し、基本的な理念に基づいた方法を絞って提起した。

結果平等教育で差をつけないようにしても、社会に出ると差がつくのが現実である。

- ・ 地域におけるアンビシャス運動ではなく、学校における取り組みをどうするか

という視点で御意見をいただきたい。

- ・ ただし、アンビシャス運動と求める人材が違えば、県の取組として整合性がとれない。同じ目標を共有して、地域、学校、家庭で取り組むことが重要である。
- ・ 県が示した課題はあえて分けると、「学ぶ意欲」は主として学校の教育力、「自尊感情」は主として家庭の教育力、「社会とのかかわり」は主として地域の教育力と分類できるのではないか。「体力」の取扱いをどうするかも含めて議論を進めたい。

アンビシャスの4つの目標、3つの運動の原則、12の具体的な取り組みは、よいと思う。これを地域の運動として、さらに広げたり、幼稚園・保育園から小、中、高、大学と連携したりすることはとてもよいと思う。

しかし、目標や運動の原則などは県下に浸透しているのか。リーダーがもっと広報するなどして、運動を展開していくことが必要である。

4つの課題をポジティブな言い方に換えれば目標像になるのではないか。3つ目の「社会とのかかわり」はもう少し具体化する必要がある。

さらに、アンビシャスの目標を分かりやすくして、整合性をとればよい。

「自他（人や地域）を愛する」ということも大切ではないか。

アンビシャス運動の経験から、目指す人物像はもう少し具体的なものを示さないといけない。

文部科学省の提起した「生きる力」は、自然界に対する人間の敗北宣言だと感じた。

発達段階で考える必要はあるが、高校生だと「社会批判力の涵養」が重要だと考える。

「自尊感情」も発達段階で少し目標が変化する。「みんな全て同じ」ではなく、「違うもの同士が理解し合う」ことが大切であり、建前だと子どもの心に響かない。

「人（自他）を愛する」ということも大切。

「相手のことを考える、思いやりのある」というのは、福岡県人はもっていると思う。「思いやり」、「真心」がキーワードとなる。

3番目は、「志の高い青少年」を育成するではどうか。志の中には、社会性や規範意識も含まれる。

「志」や「思いやり」、規範意識だと反発を招くかもしれない。

「志」はよいが、「志が高い」と「志をもつ」は違う。まず、「志をもつ」が

よいのではないか。

これまでに出示されたキーワードは、「思いやり」、「志」、「学ぶ」この3つは入れたらどうか。

「意欲」も必要ではないか。

「意欲」と「志」はオーバーラップするが、学校なので「学ぶ意欲」を入れたい。

【説明】 どちらかという保護者や大人向けの言葉になっている。子どもの心に染みる言葉を考えなければならない。

福岡の教育は落ちているという印象があるが、公立高校の大学進学率は全国一高い。退学者が多いということもあるが、子どもたちの心に響く言葉が入った方がよい。

だれに向かって働きかけるのか。教師に対するものであれば、子どもの心に響くことよりも教師向けの言葉のほうがよい。

学生向けの提言は難しい。学校現場や社会に向けた提言である。子どもにインパクトのある言葉ということも大切な視点であるが・・・。

【説明】 学校、親、企業を含めた地域社会に対する呼びかけになる。問題は親。親は子どもたちに「アンビシャスになれ」と思っていない。「生活ができて、自分のことは自分でやれて、社会に迷惑をかけない」という人生でよいと思っている親が半分以上だと思う。その親に対してどう提言するか。

親を巻き込むために、分かりやすい言葉を使うのではなく、教師が、教育現場が燃える言葉を使ったほうがよい。それを咀嚼して伝えるのは方法論である。

親を巻き込んだ活動の事例を次回までに準備して欲しい。

「学びに夢中になる子ども」「相手を思いやる子ども」という子どもの視点の言葉はどうか。高校生にはどうかと思う。

事務局へのお願いであるが、キーワードとしては「学ぶ意欲」、「思いやり」、「志」で目標像をつくって欲しい。

各学校で、すでにキーワードに関する言葉を学校目標として設定している。
学校が混乱しているのは、「学校のいうことが一番だ。」という時代になっていない。まずは、学校の信頼を回復する運動はできないかと思う。

目標像は一般的なものでよい。この場で共通認識をもつためのものである。共通の目標をもつことが大切。

「高い学ぶ意欲」を進めたい。「志」はアンビシャスとの関連でも重要。「規範」はマイナス的に言わないといけないので「思いやり」という言葉はよい。

「体力」の取扱いが難しいが。

「学ぶ意欲」の背景には疲れにくい「体力」がある。持久力のない子はあきらめるのが早い。心と体を分離されて考えられがちであるが、体も重要である。

「体力」の議論は落としどころが難しい。

「早寝、早起き、朝ご飯運動」、「就寝時間」などの課題も「体力」と深く関わっている。「学ぶ意欲」も「体力」と密接に関係している。

各課題解決の方法論として「体力」を取り上げるとよいのではないか。

「体力」は日常生活の規律など、すべてに関係してくる。

提言としてまとめやすい議論にしたい。

<まとめ>

【会長】 「学ぶ意欲」と「思いやり」と「志」をもつという目標と、県が示した4つの課題について議論を進め、最終的に4つにするか3つにするかを継続して議論する。

- ・ 事務局は、目標の原案を作成して欲しい。

5 閉会

次回の連絡：9月25日火曜日、13：00開始 ホテルレガロ福岡